

高尾山報

令和7年8月号



ご先祖様への感謝を祈りに込めて

お施餓鬼大法要 於・山麓不動院 七月十二日(土)

『伊勢物語』という作品があります。在原業平と旅する「東下り」には、富士山の姿が次のように描かれています。

富士山を見るとき、五月下旬だというのに雪が白く積もっている。

時知らぬ
山は富士の嶺
いっとてか
鹿の子まだらに
雪の降るらむ

(季節をわきまえない山は富士の嶺だ。今をいつとて鹿の子模様のようにならぬ雪が降り積もっているのだろ。)

その山は、京の都でたとえと、比叡山を二十ほど積み上げたような高さで、形は塩尻のようであつたよ。

『伊勢物語』第九段
旧暦五月の晦日(下旬)は、今の七月下旬頃に当たります。夏の富士山に、鹿の毛にある斑のような白い雪が点々と見えた時の驚きが語られています。

この「東下り」の章段は、後世の風雅の徒にも大きな影響を与えました。例えば、歌僧(歌詠みの僧侶)として名高い西行法師(一一八〇―一二二一)は、陸奥への旅の途中に駿河国(今の静岡県中部)に差し加つて、業平の歌を思い浮かべながら富士山を遠く望み見えています。西行の一代記『西行物語』には、その時の様子が次のように語られています。

駿河国に差し加つて、在原業平が「山は富士の嶺いっとてか」と詠じたのも成る程と思われた。遙かに富士山を見上げれば、時期をわきまえているかのような煙が立ち上り、山の中腹まで雲に隠れている。麓は湖をたたえ、南方には原野、前方には青々とした海が満ち満ちて、釣りをするにも都合が良い。

都を出発してから、多くの山や川、入江や海を乗り越えてきた旅の辛さも、ここに来て少し忘れる心地がした。

風になびく
富士の煙の
空に消えて
行方も知らぬ
わが思ひかな

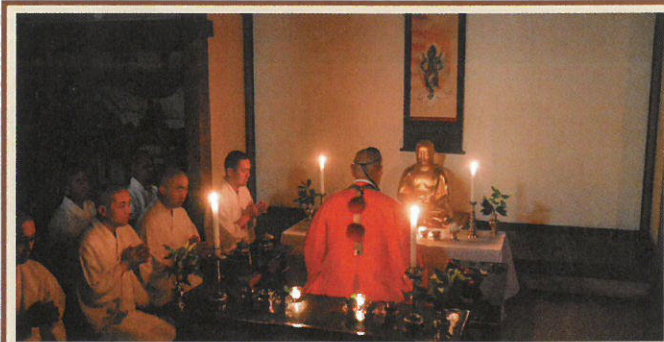
(風になびく富士の煙が空に消えて行くように、どこに向かうとするのか行方も分からない私の思いよ)

いっとなき
思ひは富士の
煙にて
まどろむほどや

浮島が原

(いつまでも続く私の思いは、富士の煙のように絶える時がなく、寝起きする場所はここ浮島が原のように、涙が溢れて浮いたように見えるよ)

『西行物語』
当時の富士山からは噴煙が立ち上っていました。西行は業平に思いを馳せながら、風になびく煙に自らの思いを重ね合わせています。「無常の煙」という言い回しもあります。消え行く煙に人生行路の儚さを観ていたので



高尾山修験道 修験得度式

六月十五日(日)

本年は高尾山中興開山六百五十年という大いなる節目の年に正當します。この佳き年に佐藤貫首大先達のもと、莊嚴なる「高尾山修験道 修験得度式」が執り行われました。

午前四時半、前夜まで降り続いていた雨も止み、静寂に包まれた高尾山の山上において、大先達より山伏としての戒を授かり、度牒の授与を受けました。この得度式は報恩謝徳の念を深く心に刻む式となりました。

しょうか。風に誘われるまま身を任せ、大いなる自然の動きとともに日々を歩む姿が見て取れるようです。

時代は下つて、富士山は平成二十五年(二〇一三)六月二十一日にユネスコの世界文化遺産「富士山―信仰の対象と芸術の源泉」に登録されました。古くから崇められてきた霊山は、今や世界の文化・自然遺産として世界中の人々を魅了しています。来し方行く末に思いを馳せ、時には人生の指針を与えてくれる存在としても聳え立っているのです。

(栃木北部教区普濟寺)

源泉に記録されました。古くから崇められてきた霊山は、今や世界の文化・自然遺産として世界中の人々を魅了しています。来し方行く末に思いを馳せ、時には人生の指針を与えてくれる存在としても聳え立っているのです。

(栃木北部教区普濟寺)

法の水茎

大正大学講師 高橋秀城

(158)

暦の上では秋を迎えた。という言葉も虚しく感じられるほど、今年も異例の猛暑が続いています。気象庁が発表した三ヶ月予報によると、この先十月まで残暑が長引くそうです。頑張りすぎずに「ほどほど」を心がけながら、ゆっくりと近づいてくる秋の足音を心待ちにしたいと思います。暑い盛り、涼しさを感ずる歌はいかがでしょう。

田子の浦ゆ
うち出でて見れば
真白にそ
富士の高嶺に
雪は降りける

(『万葉集』山部赤人)
田子の浦を通して出てみると、富士山の高嶺に真つ白な雪が降り積もっているよ)

自然詩人、山部赤人(?)

七三六(?) によつて詠まれた白銀の富士山です。直前の長歌には「神さびて高く貴き」(神々しくて高く貴い) お山とも詠われています。

雪解けが進んで春先になると、山肌の残雪が鳥の形のように浮かび上がります。「農鳥」と呼ばれる雪模様は、春の訪れを告げる合図でもあり、地元の人々が農作業を始める目安としても受けとめられてきました。

新緑の頃からは雪解けが加速して「雪解富士」(富士の雪解)の光景が見られるようになり、やがて山頂からも雪が無くなります。

富士の嶺に
降り置く雪は
六月の
十五日に消ぬれば
その夜降りけり

『万葉集』高橋虫麻呂(富士の嶺に降り積もっている雪は、六月十五日に解けて消えたかと思えば、その夜にはまたすぐ降り始めると言われるよ)

旧暦の六月十五日は、現在の七月中旬から下旬頃に当たります。富士山頂の積雪の深さの平年値データ(一九九一―二〇〇四年)によれば、「積雪なし」となるのは八月に入ってから九月中旬くらいまでの短い期間だけのこと。富士山は春夏秋冬、季節ごとに異なる表情を見せてくれます。

全国には「富士見」富士見町といった地名が存在しています。日本一高く聳える霊峰は、多くの場所から眺められるとともに、各地に残る「郷土富士」(〇〇富士)の名称からは、日本人の心を惹きつけてやまない強い思いを見て取ることができます。

高尾山薬王院にも、山頂へと通じる「富士道」

があり、頂上からは「関東富士見百景」にも選ばれた絶景を拝むことができます。奥の院、不動堂の浅間社が祀られているなど、高尾山と富士山の信仰は分かちがたく深く結びついています。

冒頭の赤人の歌が「田子の浦」(古くは静岡市清水区蒲原・由比・興津の海岸)からの冬景色を詠っていたように、数ある景勝地の中でも東海道からの眺めには格別なものがあるのでしょうか。

葛飾北斎(一七六〇―一八四九)「富嶽三十六景」や歌川広重(二七九七―一八五八)「東海道五十三次」などの浮世絵にも描かれ、十返舎一九(一七六五―一八三二)「東



高尾山頂より富士山を望む

海道中膝栗毛」に登場する弥次さん喜多さんも富士の絶景を振り仰いでいます。江戸時代中期の俳人、服部土芳(一六五七―一七三〇)の「三冊子」(白冊子)には「東海道の一すぢもしらぬ人風雅に覺束なし」(東海道も知らない人は芸術を感じる心に頼りない)と見えるように、文芸や絵画などの芸術に携わる者にとっても憧れの道であつたのでしょうか。

平安時代の歌物語に



佐藤貫首による法話



大会に参加された皆様

翌日は会場を八王子エルシイに移し、第二講の写経、第三講の松井和先生による「愛されている、そう思う子に育ってほしい」と題した講演が行われ、充実した研修となりました。

第六十三回智山保育大会が、高尾山において開催されました。本大会は真言宗智山派に所属する寺院関係の幼稚園・保育園・児童養護施設の施設長および教職員を対象としたもので、仏教精神に基づく保育の実践を目指す研修会が行われます。

山上の有喜閣大広間で行われた開会式では、大会委員長の当会会長細田峰彰様、名誉会長の佐藤貫首が挨拶されました。その後参加者は大護摩供に参列された後、第一講の佐藤貫首から「霊気満山 高尾山」と題した法話を聴講致しました。

第六十三回 智山保育大会が高尾山で開催

七月二十六日～二十七日



歴代先師の遺徳を偲び懇ろに供養する

本年もお盆を迎え、七月十二日には山麓不動院において佐藤貫首導師のもと、お施餓鬼大法要が執り行われ、檀信徒総代を始め大勢の御檀家の皆様が不動院本堂に参列され、一心に御先祖様への追善供養を捧げられました。

十三日と十六日には山上の歴代先師墓地においてそれぞれ迎え火・送り火を焚き、懇ろに御回向致しました。

施餓鬼会・先師墓地参り

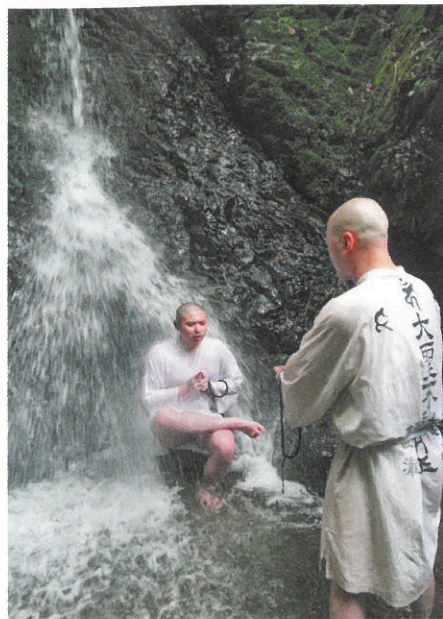
信徒峰中修行会体験記

法の雫に生かされる

法務課 村山 弘俊

みなさん初めまして、今年四月から大本山高尾山薬王院に入山いたしました村山弘俊と申します。この度、令和七年六月に行われました信徒峰中修行会に初めて参加させて頂きまして、無事成満出来たことへの感謝と、これから高尾山の職員としての心持ちをこの場を借りて述べさせて頂ければと思います。

まず、佐藤秀仁貫首を



初めて琵琶滝で滝行を修す筆者

はじめとして、一緒に登拝した先輩方、参加された御信徒の皆様、また飯縄大権現様のご加護の元、お蔭様をもちまして成満できましたこと御礼申し上げます。山登りが不慣れな自分にとって、先輩方の智慧や信徒の方々の登拝する姿勢に刺激を受けて臨むことができました。

今回の峰中修行では初めて琵琶滝で滝行をさせ

て頂きました。「南無大聖不動明王」とひたすらにお唱えして自身の身と心をお清めし、滝に打たれ、仏様や山に対して素直な気持ちでいることが重要なかなと感じておりました。

自分にとってできることはなんだろう、こんなのかな、あんなのかな、こんなことを思われてないかな、自分の理想や、妄想、普段の生活の中で考えることが多いものでありますが、お山に登らせて頂いている時はその感情や心から離れた気が致しました。ひたむきに登り、読経し声を出し、ひたすらに登り、読経し声を出す、この経験は普段の生活では考えられないほど贅沢なものであるかと思えます。

自分をみつめ直すことが、人への接し方も変わることに、仏教の言葉でもある「縁」という言葉は私たちの身近な生活や、自然現象の中に含まれているものです。家族、友人、先人、新たな人との出会いや、これから出会う人、これは自分一人では決められないもの、決めていいものでは到底ありません。

こうしたことには全て原因があり、巡り巡って自分の生活の中にあるものと現れてくれるものがあります。お山の様子もまさしく「縁」によって成り立つもので、晴れの日も雨の日も、杉の木々の成長も、動植物が成長するのも、原因があつて結果があるという因果関係なのだと実感いたしました。

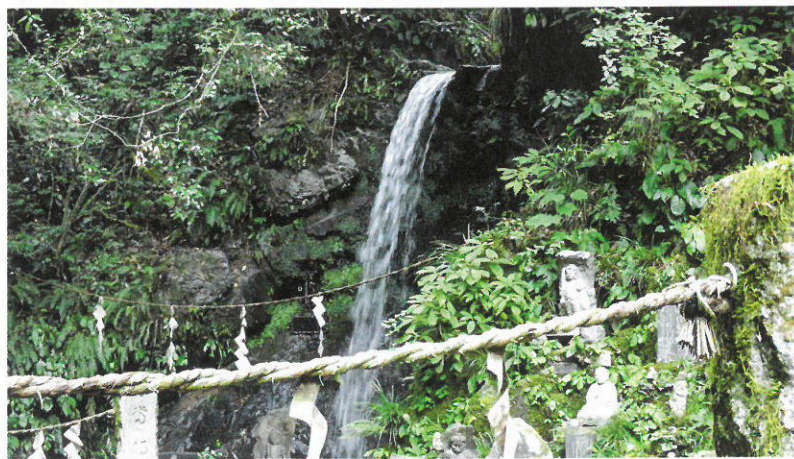


ひたすらに登り、ひたすらに読経する

合掌



琵琶滝（『高尾山石老山記』国立公文書館デジタルアーカイブ）から



現在の琵琶滝

註 石老山は神奈川県相模原市緑区にある標高七〇二メートルの山。山腹に真言宗顕教寺が所在する。山中に巨岩が点在する信仰の山。

《参考文献》『日野市史料集』続地誌編（二九九）おことわり 本連載では史料の引用について、適宜、読みやすく原文に手を加えています。

に登り詰めたり。この所に休所有り。これより滝の本に下る事一町（約百メートル）余り」という直後の記述に明らかである。この後、幕末に近くなると琵琶滝へ行く道すがら二軒茶屋があり、それは現在の東京高尾病院の位置とされる。病院の敷地を抜ける道筋が往

時は琵琶滝への道であり、竹村の「高き所に登り」という表現はそれに整合する。二軒が参籠所だったのか、茶屋が滝垢離をする者を宿泊させていたかは定かでない。ただ、竹村は「登り詰め」ところに休所があったとするので、そちらが二軒茶屋だった可能性もある。

では、竹村の琵琶滝評を見てみよう。
姿殊勝にして音もまた喧しからず。琵琶滝と名付けたるは形より言うか、また音の幽玄なるより言うか
竹村が訪れた季節は『多波の土産』の作者よりもひと月近く先の、新暦で二〇月も半ばを過ぎ

た頃だった。滝の水量は降雨量にも影響されるので一概には言えないが、秋も深まり落ち着きを見せていたのだろうか。竹村は滝の高さ二丈（約六メートル）、下部の幅が四尺（約一メートル二センチ）余りとするが、挿絵を見る限り、現在よりも水量の多い感がある。

その名が琵琶の形に由来する見立てからすれば、きれいな三角形を形づくっていたのだろう。

『多波の土産』の作者は夕暮れで恐らく人気もない山中の道を抜け、一之鳥居の脇に出た時には「はつと嬉しく」と、ようやく心地ついた実感を記している。落合の番所前の笠を預けた茶屋で時刻を問うと「六つに間はあらじ」と午後五時近くであった。千人町（八王子宿の西端／八王子市千人町）まで戻るときは六時半（午後六時）過ぎとなり、提灯を灯したという。

高尾山年代記

歴代山主の事跡をたどる

明治大学博物館 外山 徹

68

二十世岳純 二つの紀行文 3

『高尾山石老山記』（文政一〇年・一八二七）は、『多波の土産』（同二年）という二冊の紀行文を取り上げ、当時の高尾山内の光景と旅行者の一手一投足に注目している。

境内の茶屋

『多波の土産』の作者は、その朝、百草の松連寺（東京都日野市）を立ち、高幡不動（同）にも参拝するなどし、八王子宿にて昼食を摂っている。高尾山に登ったのは正午をだいぶ過ぎた頃であろう。この旅程では、金比羅台下の急登に音を上げていたのもいたし方なしといったところか。

山上の仏堂と飯縄権現社、奥之院を参拝した後、薬王院に着いたのが

夕七つ時（午後三時から五時頃）とするが、夕刻と言ってよい頃合いだったと考えられる。「別当前休所に入りて、菓子など食い」とある「別当」は薬王院のこと。現在の大本坊がその寺域で、「黒門」と呼ばれる僧侶専用の門に向かって左側の場所に、文字通り参詣客を接待する設待湯呑所があり、茶菓も供されていたというところだろうか。『高尾山石老山記』の作者竹村立義は、現在の四天王門の位置にあったかつての「黒門」を入った広庭のところ、と記しており、「黒門」の境内には二ヶ所があったことになる。

遠くで鳩のような鳴き声がするので寺僧に尋ねると、仏法僧の鳴き声だと教えられる。前年、竹村が聴くことが叶わず残念がった仏法僧の鳴き声だった。『多波の土産』の作者には「その声まことに巖間（岩の間）に響き、恐ろしきまでいと寂し」と聞こえた。狼が出るという「金比羅の山の僧の物語に聞き怖じし」と、八王子に下らんといい、しからばとて、ここを立ち出でぬ」と、休所に着いた際には「寺に泊まらん」とも考えていたにもかかわらず、急ぎ下山することに相成った。

琵琶滝への難路

琵琶の滝と印杭ある道より下る」の印杭は、現在、御護摩受付所の脇に移設されている江戸赤坂の足袋屋清八が建立した琵琶滝道の道標のこと。現在の四天王門の外側にあった。崖の縁で今日ではとても下山する道筋があったとは思像しにくい場所だが、実際、その道は難路だった。

琵琶滝の光景

『多波の土産』の作者は琵琶滝について、

水音すさまじうして、物の音おだやかにいとすこし、仰ぐは杉の大樹のみ余木を交えず青々たり

と記す。その清冽な雰囲気、多少なりとも疲労感も減ぜられただろうか。「物の音おだやかにいとすこし」とは、滝の音に他の雑音がかき消されて、という意味か。

滝霧の香や杉の香りの

隔てなき

という句からは、杉の巨木に囲まれ森閑とした中、とうとうと滝の落ちる様子が伝わってくる。秋分過ぎの午後四時半前後ともなると、人の気配もなかっただろうから、さぞかし神秘的な雰囲気であっただろう。

さて、もう一方の竹村立義は、表参道を上る前に琵琶滝へ立ち寄っている。その描写もたどつてみよう。竹村は一之鳥居の脇に「ひわの滝道」という道標を見て、そちらに進んでいる。「坂道急ならず、次第に登る。その内民家有り」とは、高尾山の寺領内に起居する農民の家屋である。続く「その内、滝の近くに二軒有り」について、「諸病に験有り」として、滝垢離をする者が一七日あるいは二日などの祈願をし、満行となるまで宿泊すると記す。この二軒は滝の近くとは言え、現在の参籠所の位置でないことは、「ようやくにして高き所



初登嶺に臨まれる吉田猥下



当山貫首による乾杯の発声

去る七月八日、瑞雲たなびく好天に恵まれた総本山智積院に於いて真言宗智山派管長 総本山智積院化主第七十三世大僧正 吉田宏哲猥下の初登嶺が厳かに執り行われました。

初登嶺とは、新しくご就任された管長猥下の入山式の事で、初登嶺のみ開門される総門よりお入山された管長猥下は先ず成田山新勝寺岸田御貫首より花束の贈呈を受け川崎大師平間寺藤田御貫首をはじめ宗内御重役のお出迎えの中、金堂へと進列し法樂を奉げました。続いて山内諸堂をご巡拝されました後、講堂に於いて就任式が厳修されました。

午後にはハイアットリージェンシー京都に会場を移し大本山川崎大師平間寺御貫首藤田隆乘大僧正、埼玉第九教区教区長常福寺御住職服部元俊僧正より祝辞が述べられた後、当山佐藤貫首の乾杯の発声により盛大に祝賀会が執り行われました。

真言宗智山派管長 総本山智積院化主 第七十三世 大僧正 吉田宏哲猥下 初登嶺



一心に写経する参加者の皆様



皆様の写経を御本尊様の御宝前にお納め致しました

梅雨が明け夏本番を迎えた高尾山では、恒例の高尾山写経大会が開催され、百名を超える方々に参加を頂きました。

会場の有喜閣大広間に集まった参加者は開会式に際し、佐藤貫首をはじめとした山内の僧侶と共に般若心経を誦誦し、その後一文字一文字に仏様を感じて自身の内面を見つめながら、丁寧に写経されました。また、自宅で写経して高尾山に納める在宅写経も合わせて行い、大勢の方々の参加を頂きました。

写経大会終了後には、参加者が心を込めて書写された写経を、御本尊・飯縄大権現様の御宝前にお納めし、当山僧侶が皆様それぞれに諸願成就を心よりご祈念申し上げました。

一文字一文字を大切に 第四十二回 高尾山写経大会 七月二十七日(日)

真言宗智山派前管長 布施浄慧大僧正御来山 七月十八日(金)

真言宗智山派前管長・布施浄慧大僧正が、随員と共に初夏の日差しが降り注ぐ高尾山へ、真言宗智山派管長退任の御挨拶のため御来山されました。

布施大僧正は、僧侶の出迎える大玄関に進まれ、書院松の間において佐藤貫首と親しく挨拶を交わされました。その際、大僧正より去る六月二十七日をもって管長を退任された旨、また在任中のご支援に感謝の意を賜りました。

御挨拶を終えられた後、当山僧侶が見送るなか、高尾山を後にされました。



布施大僧正(左)と佐藤貫首

いけばなの心 65

華道教授 佐藤 宗明

暦の上では八月に入り、まもなく立秋を迎えますが、実際にはこれからが暑さの本番といったところ。今回は、使用する器から少しでも涼やかさを感じていただけるような作品を目指しました。

この作品は、ガラスの花器を用いた生花新風体です。花留めには白い

花材には、すっと伸びたイグサと、キク科の小さな花であるローダンセマムを取り合わせました。下段には、丸く細かい葉が可愛らしいシダの仲間・アジアンタムを添えて、全体のバランスを整えています。

写真では伝わりにくいかもしれませんが、実際のサイズはとて小ぶりで愛らしく、日常生活空間にもさりげなく飾って頂けるような作品に仕上げました。



花材：イグサ、ローダンセマム、アジアンタム

観音菩薩の宗教

92

国際教養大学特任教授 金岡秀郎

如意輪観音（その30）

ブッダの時代から仏教は女性の出家に門戸を開き、男女平等の思想を説いていた。このことは他の諸宗教に比して稀有のことであった。前号で述べたように、初期の經典には、最初の比丘尼となるマハー・パジャーパティーがやってきた時、当初その申し出を再三断つたとある。その後、最終的に出家を許可するものの、女性に対する戒律『八敬法』(aṭṭha garudhamma)の遵守を条件にしてであった。『八敬法』は『八重法』などとも訳され、比丘尼が比丘の下位にあつて従うべきとする八つの規定であった。こうした比丘尼の比丘に対する厳しい規則を見れば、これまで筆者が述べ

てきた仏教における男女平等の思想は否定しなければならなくなる。しかし近年の研究によれば、『八敬法』はブッダの時代のもではなく、後世、「保守的」男尊女卑的」な部派仏教によって付加されたことが明らかにしつつある(Ueki, Masatoshi, Gender Equality in Buddhism, Peter Lang, 2001. Bhikkhu Analayo, The Foundation History of the Nuns' Order, Projekt-verlag, 2016. 植木雅俊『差別の超克―原始仏教と法華経の人間観』講談社学術文庫、二〇一八年)。そうした男性優位を主張するインド保守派の反動を再びブッダの平等思想に戻そうとした

のが、『法華経』などに説かれる大乘仏教の思想的・社会的運動である。以下ではその経緯を辿っていくが、まずはブッダがマハー・パジャーパティーの申し出を断り、『八敬法』を定めた際のブッダとアーナンダのやり取りを引用する。出典は『増支部経典 (Anguttara Nikāya 8.51)』や『律藏 (Vinaya piṭaka II, 254-256)』などである (Analayo, op. cit. pp.231-232. また、植木雅俊前掲書、一六七―一六八頁参照)。

「アーナンダが言った(中略)。「世尊よ、マハー・パジャーパティー・ゴータミーは、世尊にとつて大きな恩義のある存在です。彼女は世尊の叔母であり、乳母であり、育ての母でもあります。世尊の母が亡くなったとき、彼女は世尊に乳を与えました。このゆえに、世尊よ、女性たちも、如来が説き示された法と律のもとで、在家を捨てて出家する



タイ国バンコクのワット・ポー寺院 (Wat Pho) の壁画に描かれたブッダの説教を聴く比丘尼の図。19世紀。
<https://snfwrenms.wordpress.com/2012/02/01/bhikkhuni-dhammadinna-verse-and-mural-painting/>

ることが認められたならば、善きことでしよう」ブッダが答えられた。「アーナンダよ、もしマハー・パジャーパティー・ゴータミーが八つの尊重すべき法(garudhamma)を受け入れるならば、それが彼女にとつての正規の受戒となるであろう」

続いて『八敬法』における八つの項目がブッダによって示される。以下に明瞭に比丘の比丘尼に対する上位を定めた三項目を引用しよう。

(一) 受戒して百年経つ

た比丘尼であっても、その日に受戒したばかりの比丘に対して、敬意をもつて礼拝し、起立して迎え、合掌し、礼儀を尽くすべきである。これは、一生涯にわたつて敬い、尊び、讃え、崇め、決して破つてはならない根本的な法である。

(七) 比丘尼は、いかなる方法によつても比丘を非難したり、罵つたりしてはならない。これもまた、一生涯にわたつて敬い、尊び、讃え、崇め、決して破つてはならない

根本的な法である。

(八) 本日より以後、比丘尼は比丘を批判することを許されない。だが、比丘は比丘尼を批判することが許される。これもまた、一生涯にわたつて敬い、尊び、讃え、崇め、決して破つてはならない根本的な法である。系統的関係はなからうが、これらは『新約聖書』

「テモテへの第一の手紙」の2:11-12「女は静かにして、よく従う態度で教えを受けなさい。女が教えたり、男を支配したりすることを、わたしは許しません」に近似する(『観音菩薩の宗教』90)。ドイツ人出身のテラヴァーダ仏教学者にしてスリランカで出家したアナラーヨー (Bhikkhu Analayo) は、ブッダが一旦は女性の出家を拒否したのが事実としても、それは「仏陀の拒否は、当時まだ仏教教団が形成途上にあり、適切な住居やその他の無家生活に必要な環境が整っていない

かったことから、シャーマン族の女性たちにとつてそのような生活はあまりにも過酷になりかねないという、仏陀の配慮の表現として機能している」(Analayo, ob. cit. 67)と解釈している。しかしアナラーヨー自身は、『八敬法』が初期仏教における女性出家者への門戸開放と矛盾しており、他のバリー語テキストとの文献学的研究により、尼僧教団が成立する中で後世の部派仏教時代に付加されたものと考えている (Bhikkhu Analayo, op. cit. p.73 footnote (73), p.76, p.100)。同様に植木雅俊は、「筆者はこの八つの条件が後世の男性出家者によって創作され、付加された可能性は否定できない」と考える(前掲書、一六九頁)と結論づけている。すなわち、ブッダの時代の仏教には『八敬法』のごとき「女性差別」の思想・規定はなかったという解釈である。

『八敬法』のほかにも、女性を下位・劣位に置き、蔑視する見解がいくつかの仏教文献に見られる。それは『三從五障』と称されるものである。植木雅俊は、三從は紀元前二世紀頃に成立したヒンドゥー教の『マヌ法典 (Manusmṛiti)』に規定された説とし(前掲書、二〇―二二、一七八頁)、以下の条文を挙げている。「幼くても、若くても、年老いても、女は独立して何も行なつてはならない。家の中でなされるべきこと(家事)でさえもである(五・一四七)。子どもの時は父親の、若い時は夫の、夫が死んでからは息子たちの支配下にあるべきであつて、女は、独立(自由)を享受すべきではない。(五・一四八)「女は」幼いときには父が守り、若いときには夫が守り、老いたときには息子たちが守る。女は独立に値しないのである(九・三三)」

植木雅俊によれば、「仏教教団が紀元前三世紀末以降、部派分裂を繰り返して小乗仏教化し始め」、「紀元前一八〇年ごろ仏教を重んじていたマウリヤ王朝の崩壊とともにバラモン教が再興され始めた」ことを背景に『三從』説は紀元前二世紀前後には仏教に取り入れられたのではないかとされている(前掲書、一七八頁)。さらに、ブッダの言葉として『三從』に言及しているのは漢訳の『仏説玉耶経』と『玉耶経』の二つであることを根拠に、「アショーカ王のころにはまだ、『三從』説は仏教において語られておらず、『三從』説が仏教において取り上げられたのは、部派分裂以降ということの意味している」としている(同、一八八頁)。

一方の五障は、女性になることのできない五つの位を指す。テキストによつて若干の異同があるが、植木は以下のように列挙している(前掲書、

一八三頁)。帝釈天・魔王・梵天王・天輪聖王・三界の魔王(『五分律』)、天帝釈・魔王・大梵天・天輪王・如来／等正覚(『瞿曇弥記果経』)、帝釈・魔王・梵天王・天輪聖王・仏身(『妙法蓮華経』)。これらを文献学的に考察したうえで、植木は『五障』説が現れたのは、紀元前一世紀ごろで、『小乗』と貶称された比丘たちによつてなされた主張であった。その背景には、当時のヒンドゥー教的な女性蔑視の觀念の影響があった」とした(前掲書、一九四―一九五)。

以上によれば、『八敬法』や『三從五障』の「女性差別」的思想は、本来のブッダの教えにはなく、後世の保守的比丘たちの付加と見ることができる。次回はこれらが再びブッダの平等思想に回歸していく経緯を見ていきたい。

高尾山 季節散歩

和風月名
初雁月
「はつかりづき」

旧暦八月は現在の九月中旬、十月上旬ごろにあたるため、現代とは季節感がやや異なり、別名も秋を感じさせる言葉が多いです。雁は渡り鳥でシベリア方面から越冬するため日本へやってきます。そのため和歌や俳句などでは、秋の到来を告げる鳥として描かれておりました。

今月の風物詩

かき氷

日本では夏の風物詩として親しまれており、縁日や祭り、夏の屋台などでよく見かけます。平安時代には氷を削って食べる風習があったそうですが、冷凍設備の無い時代に氷は貴重品でした。現在では昔ながらの粗目のかき氷や、雪のような触感のかき氷まで様々あります。

健康登山者投稿作品

季節の絵手紙「雨の日も良き」

八王子市 峰尾里枝子 様



一步一步煩惱滅除

百八の階段を昇り、悩みや煩い事を取り除きましょう

四十三段 折れぬ心が、運を切り拓く

世の中は、常に変化し続けています。良いことも、悪いことも永遠に続くものではありません。たとえ今が困難な状況でも、信念を持ち続けることができればやがて運気は動き出し、人生はより良き方向へと進んでいくでしょう。

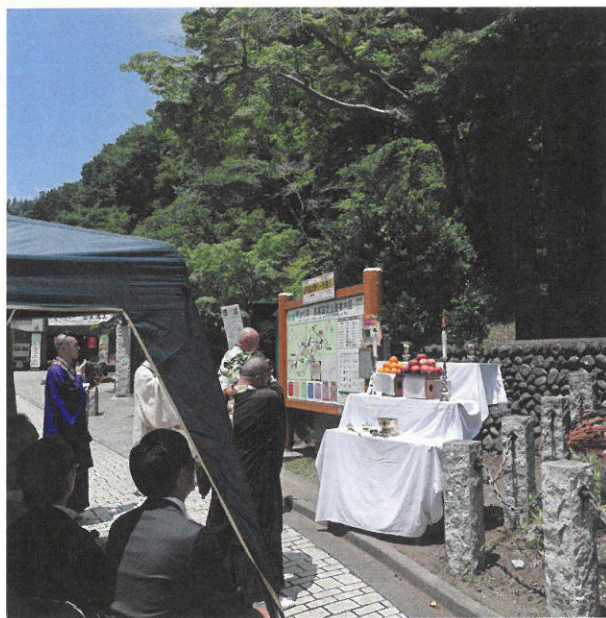
交通安全祈願碑法要厳修

六月三十日

高尾山麓の清滝駅前には、令和元年五月一日、高尾交通安全協会の有志により建立された「交通安全祈願碑」がございます。これを記念して毎年春には、佐藤貫首導師のもと、交通安全を祈願する法要が厳かに執り行われております。

祈願碑には、先代大山貫首の揮毫の「一心祈願 人車一体 愛情運転」の言葉が刻まれており、訪れる人々に交通安全の大切さを訴えかけています。

当日は天候に恵まれた青空のもと、高尾交通安全協会の田中会長をはじめ、多くの会員の方々が参列し、高尾山を訪れた参拝者と共に、交通事故のない社会の実現を一心に祈願しました。



事故無き世を一心に祈る

おはなし散歩道 八朔祭り

湯沢町 富樫 あい子

夏休みにリンはひい爺さんの所に来ました。
「魚沼は涼しいね」
「風が爽やかなんじや。ゆつくり遊んでいけ」
「はい、チュウ助は？」
「明日は、八朔祭りだ。神社の掃除や草刈りに行つたから帰りは遅いぞ」
「八朔祭りってなに？」
「昔から陰暦の八月一日を八朔というのじや。その日は、鎮守様と稲荷様にお祈りして五穀豊穡を願う祭りなのだ」
「楽しい事があるの？」
「後はチュウ助に聞け」と言い、ひい爺さんは薬缶に水を注ぎました。
「チュウ助の所に行く」
リンは飛び出します。
「待て、待て！」
用意して置いた稲荷寿司を持ってきました。
「鎮守様の境内のお稲荷様にお供えしてくれ」

お稲荷様も元々は稲作の神様だと言いました。
「はい」とリンは駆け出して行きました。
神社に着くと掃除も終りチュウ助は居ません。
「まあ、いいや！」
リンはお稲荷様にお供えして鎮守様にお参りして帰ろうとした時、お稲荷様の前で四、五歳位の女の子が泣いています。
「どうしたの？」
「お祭りがあると聞いたけど分からないの。これ食べたの」
両手にお稲荷を握り、涙目でリンを見えています。
「お供したお寿司だ！」
怒りたい気持ちを堪え、
「どこから来たの？」
鎮守様の森を指さします。
リンは森の奥は知りません。女の子はリンの手をぐいぐい引いて森の中に行きます。



「どこに行くの？」
女の子はあまりお話が出来ません。リンは手を引かれ森の奥に進みます。森の中は静かです。木の枝に小動物を見ました。
リスだ！可愛い！
追いかけてながら木の間を走りましたが、見失いました。女の子はリンの姿に微笑んで、遠くを指さしています。深い森の奥に提灯見たいな明かりがぼんやり見えます。
「行ってみよう！」
リンの言葉に女の子は大きく頷きました。

祭りかな？ 方々から浴衣を着て頬被りした人が来ます。リンは何が始まるか興味深々です。
「これ見てから行く？」
女の子はリンを見上げてニッコリしました。
ピッピッと笛、太鼓に三味線がなり始めると、顔を真っ赤に塗り、髪の毛が真っ白、歯を金箔に塗った獅子が舞い狂うのです。他に柴を刈る、老夫婦。そこに突然天狗が現れて、婆さんが腰を抜かした時、突然女の子が飛び出し天狗に飛び掛か

かりました。その後ろ姿に大きな尻尾が跳ね上がったのです。キツネだ！と叫び、リンはひい爺さんの家に走り、今の出来事をすべて話しました。
「本当につづくりした」
ひい爺さんは微笑み、「女の子は稲荷寿司を食べたがリンが叱らなかつたお礼に、稲荷神社の奥宮に行き『獅子起しと天狗の舞』を見せたのだ」
キツネの太神楽は八朔祭りで神に奉納する尊い舞です。（こども風土記）
(挿し絵・小出 茂)

日程表

一日目	二日目
10:00 高尾山麓不動院 集合・受付	2:45 起床
10:30 開会式	3:30 出立
11:00 昼食	3:40 神変堂法楽
11:30 出立	3:45 回峰行
12:00 滝行	4:45 山頂法楽
14:00 回峰行	5:30 朝勤行
16:30 かしき谷にて法楽	6:00 朝作務
17:00 坊入	7:00 朝食
17:30 入浴	8:00 諸堂参拝
18:30 夕食	9:45 法話
20:00 就寝	10:45 昼食
	11:45 柴燈大護摩
	13:30 閉会式
	高尾山麓不動院
	14:00 解散

【信徒峰中修行会】を、十月十一日から十二日まで二日にかけて開催致します。

高尾山に広がる大自然全体を道場として、御本尊・飯縄大権現様に身を任せ、一心に修行してみたいかがでしょうか。滝行や夜明け前に行われる回峰行、また法話や有喜苑での柴燈大護摩供等を行います。

回峰行では、舗装されていない暗い山道を一定のペースで歩きますので、体力に自信のある方のみ御参加下さい。

※申込締切後、詳細を示した要綱をお送りします。



第百二十五回 信徒峰中修行会 十月十二日(土)～十月十二日(日)

申込期間

八月二十五日(月)～九月十九日(金)

参加費

二万五千円

※保険料含

定員

四十人

※二十歳以上

定員となり次第締め切ります。ホームページでご確認下さい。

集合

高尾山麓不動院

服装

運動着

運動靴(登山靴可)

持参品

ヘッドライト

弁当

(初日昼食分)

軽食

(二日目未明分)

雨具

(カッパ・ポンチョ)

洗面用具、タオル

寝間着、筆記用具

リュックサック

※お持ちの方は、念珠や錫杖をご持参下さい。

高尾山内八十八大師巡拝のご案内

多くの方が参拝できますよう左記のように二つのグループに分け、途中(山上十二丁目茶屋前第十七番札所)で合流し、一緒に巡拝いたします。

A、不動院から蛇滝を経由して薬王院まで歩く

B、ケーブルカーを利用する

(蛇滝周辺の御大師様は巡拝出来ません。また、ケーブル代金は自己負担になります。)

日程 十月三日(金)

行程 山麓不動院↓蛇滝↓仏舎利塔↓大本堂(護摩修行)↓坊入(昼食)↓一号路(下山)↓不動院(献灯式)↓解散

※大師堂は改修工事のため参拝いたしません。

参加費 五千円(昼食代・保険料含む)

集合場所 山麓不動院(八時集合)

定員 四十名 ※定員に達し次第募集終了(当山ホームページにて告知)

申込方法 ハガキに郵便番号、住所、氏名、生年月日、性別、電話番号を明記の上、左記までお申込み下さい。

または、ホームページ・QRコードからお申込み頂けます。その際には必要な事項をフォームに入力して下さい。

募集期間 八月二十五日(月)～九月十九日(金)

〒一九三二八六八六

八王子市高尾町二二七七

大本山高尾山薬王院 八十八大師係

※申込み後、順次行程表・詳細をお送り致します。



高尾山の昆虫

キマダラカミキリ

高尾山では近年ほとんどの灯火が、水銀灯からLEDに換えられました。これは時代の要請であり致し方がないことですが、夏季の灯火に無数の虫が集まって奏でる幻想的な眺めが見られなくなつたのは残念に思います。

それでもLEDだと全く虫が飛来しないという訳ではなく、従来の水銀灯が十だとすると一・五くらい割合で見つけることができ、そんな健気な虫の一つがキマダラカミキリです。

キマダラカミキリとも呼ばれるように、ミヤマカミキリに似た雰囲気を持つ大型のカミキリで、ビロウドを思わせるような光沢のある斑模様で綺麗です。本種は夜間にクヌギ、コナラ等の樹液でカブトムシ、クワガタに混ざって食事をしてる姿を見かけます。

てつきり夜行性の種と思いきや、昼間にクリやアカメガシワ等の花上でも度々出会いますので、昼夜共に活動しているようです。

灯火に集まる他の常連メンバーが疎遠になる中、本種はLEDに対して免疫があるのかのごとく、今後も元気な姿を見せ続けて欲しいものです。

(撮影・文松島 孝)



お申し込みについて

左記のいずれかの方法でお申し込み下さい。

- ① ハガキに必要事項(郵便番号・住所・氏名とふりがな・年齢・性別・生年月日・当日連絡のつく携帯電話番号・緊急連絡先(電話番号・名前・続柄)・アドレス)の有り無を明記してお送り下さい。
- ② QRコードからお申込み下さい。



●お車でお越しの際には山麓祈禱殿駐車場をご利用下さい。お問合わせのある方は時間内(九時～十六時迄)に信徒峰中修行会係までご連絡下さい。

十八本山参詣(2)

秋遊大本山隨心院

廻廊秋風觀池中

小野小町極艶紅

彩色屏風極絢麗

不絶参詣佳麗同

厚木市 荒井 一雄

にはか雨 去りにし庭にひかりたる

柘植のみどり葉うら眺めたり

秋、大本山隨心院に遊ぶ

秋風吹く渡り廊下を廻り

池の中を観る...

小野小町ゆかりの寺は

何処こか女性好みの

紅艶に満つ...

極彩色の屏風は

正に絢爛華麗そのもの...

小町に同様の佳人・麗人の

参詣が今も絶えず...

毎日の
お護摩奉修時間

午前9時30分

// 11時00分

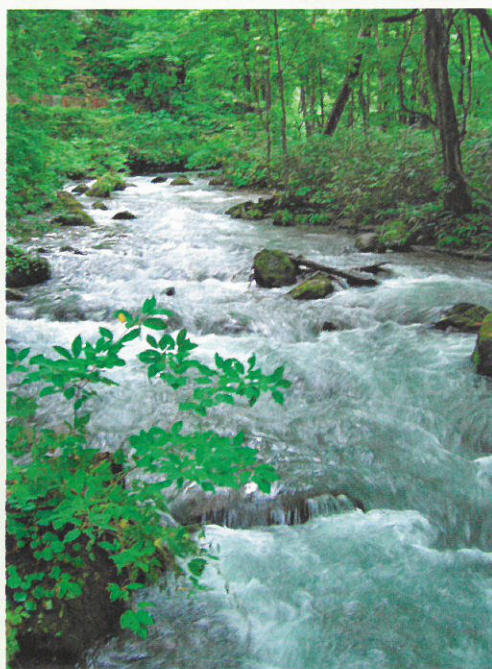
午後0時30分

// 2時00分

// 3時30分

ご講中・団体等
御相談下さい。

令和七年盛夏

暑中お見舞い
申し上げます。

登山だより

九月行事日程

一日〜七日

聖天秘供(聖天堂)

九日、二十一日

弁天秘供

一日、九日

御詠歌勉強会(十時山麓不動院)

八日

仏舎利詣り(仏舎利塔)

十三日、十四日

聖天堂開扉法要

二十七日

月例写経会(十三時山麓不動院)

二十八日

奥の院開扉法要(十時奥之院)

高尾山とんとんむかし

「語り部の会」

(十二時半山麓不動院)

高尾山報助成金志納者御芳名(順不同・敬称略)

東大和市 中川 彰久

八王子市 石坂 和夫

前橋市 梅川 孝造

足立区 中山 恵司

八王子市 宮島 光珠

宮古市 佐藤 昇

姫路市 石原 攝子

八王子市 小池 まり子

小平市 関 道雄

熊谷市 吉野 文雄

新座市 彰山 粧麗

高尾山健康登山者一同

二十一日

飯縄様御縁日

神徳報謝百味飲食供

(九時大本堂)

☆神徳報謝百味飲食供

高尾山御本尊飯縄大権

現様の日々の御加護に感謝し、沢山の御供物を捧げて御本尊様威光倍增の為、御供養申し上げる法要です。

皆様の御志納を受け付けておりますので、ご希望の方は大本堂までお申し出下さい。尚、法要終了後に百味のお札を授与致します。

毎月二十一日午前九時勤修

御志納金 一口三千円以上

高尾山報助成金
御志納のお願い

当山では、大護摩修行

等により御縁を結ばれた御信徒様に高尾山報をご送付しております。

引き続きいてご愛読して頂けますよう、皆様方の助成金御志納をお願い申し上げます。

下記のQRコード
から高尾山薬王院
のホームページに
アクセスできます高尾山薬王院ホームページ
<https://www.takaosan.or.jp>

発行所

東京都八王子市高尾町2177

大本山

高尾山薬王院

郵便番号 193-8686

電話(042)-661-1115(代)

FAX(042)-664-1199

発行人 犬山秀康

編集人 菅井倫浩

印刷 ヒラツカ印刷社

毎月1回1日発行

1部50円